

CIEC Newsletter

第7回CIEC研究会のお知らせ

日時： 98年10月31日(土)14時~17時40分
場所： 大学生協杉並会館 2階会議室

テーマ：“情報教育の2000年問題”
「教育の一貫性の中での高校における
情報教育の現状と問題点および将来展望」

報告者：
「高校における情報教育の現状と問題点(仮題)」
飯田 満 氏 都立青山高校

「大学の情報教育から初等中等教育に
何を求めるか(仮題)」
生田 茂 氏 東京都立大学

コーディネーター：
綾 皓二郎 氏 石巻専修大学
山田 祐仁 氏 辻調理師専門学校

98PCカンファレンスは終了いたしました。

7月28日から30日の3日間、日本福祉大半田キャンパスにて参加者476名と80名近いメーカーの方々が一堂に集い、すばらしい研究交流会を催すことができました。

来年の99PCカンファレンスに向けてスタートしました。皆様のご協力をお願いいたします。

CONTENTS

第7回研究会のお知らせ	1
CIEC 会員状況	
98PCカンファレンス報告	
<ニュース・トピックス>	
第6回研究会報告	2
<会員コラム>	
CIEC 新理事の抱負	6
はじめまして	9
海外報告	9
<CIEC 活動報告>	
活動日誌	10
1997年度第1回理事会報告	11
1997年度第2回理事会報告	
1998年度第1回理事会報告	12
<ML 討論>	
メーリングリストから	12
<地域研究会のお知らせ>	
山口大学講演会・講師三宅氏	14
98PCカンファレンス九州	
<ソフトウェア委員会>	15
<会員の皆様へ>	16

CIEC会員状況	98.10.19現在
団体会員	76団体(企業27 生協49)
個人会員	596名

第6回研究会報告

物理教育テキスト研究会

日時：5月23日（土）

会場：コープイン京都 会議室

会誌4号の特集「自然科学教育へのコンピュータの利用」の執筆者と物理プロジェクトのメンバーを中心に理科離れとコンピュータというテーマで研究会を開いた。

報告1：Web上の物理教材

- プリントメディアからマルチメディアへ -

徐 丙鉄 氏（近畿大学工学部）

報告2：Java 言語による分子動力学ライブラリ

石井 晃氏（鳥取大学工学部応用数理工学科）

報告3：科学を楽しむ

酒井 敏氏（京都大学総合人間科学部）

報告4：学ぶ道具としてのネットコンピュータ

小西 浩之氏（滋賀県立日野高等学校）

報告5：ソフト紹介

矢野 孝一氏（株式会社ヤノ電器）

各報告に続いて質疑討論があり、現在の理科教育のかかえる問題を中心に活発な議論となった。

- ・苦勞して作成する教材だが本当に役だっているのか？
 - ・マルチメディア教材といっても携帯電話やテレビゲーム世代の学生には魅力が薄いのではないか
 - ・進歩の早い科学を教えるためには時間をはしょれるマルチメディア教材は有効であるが果たしてそれで基礎学力が落ちないか？
 - ・入試を通過するために物理などが暗記科目となってしまうことが問題だ
 - ・専門に必要な科目を高校で学ばないで学生が推薦入学してきたりする
 - ・素晴らしい実践例として示される学校は教師個人の努力によるところが多く、システムとして確立していないその後、98PCカンファレンスのイブニングトーク（7月28日）でも「物理プロジェクト」の公開会議をもった。その結果名称をもっと広い「自然科学部会」に変更した。公開メーリングリストを立ち上げ、ホームページやFTPサービス等を開始して、広く興味のある方の参加を呼びかけていく。
- 研究会での報告の要旨は以下のようである。

Web上の物理教材

- プリントメディアからマルチメディアへ -

徐 丙鉄 会員

近畿大学工学部

将来においてもを広く利用されるマルチメディア教材であるための条件としばしば話題にされる問題点を考えてみたい。

(1) マルチメディア教材の標準インターフェイス

これまでのマルチメディア教材は、例えばOSはMacOSでソフトはHyperCardといった具合で、OS依存、ソフト依存であったため、折角の教材が広くは利用できなかった。Internet上のWWWの普及のおかげで、Webブラウザがマルチメディアの標準インターフェイスといえる状況になった。これからの教材はWebブラウザを利用することで、「Write once, run anywhere」（これはJavaの標語でもある）となる。

(2) Webブラウザ上の言語

Web上で標準的に利用できる言語には、JavaScriptとJavaがある。JavaScriptはHTMLファイル中に直接書き込む、ブラウザのマクロ言語的なもので、グラフィックス機能がないが、手軽な点が利点である。一方、Javaはオブジェクト指向のプログラミング言語で、これで作成したアプレットはネットワークを通じて配信されWebブラウザで実行できるので、これからのマルチメディア教材におけるシミュレーション作成用言語の主流になると思われる。しかも、Javaの標語Writeonce,runanywhereに端的に表現されているように、機種依存性OS依存性からの脱却が期待できる。

(3) Web上のマルチメディア教材の問題と疑問、今後の展開など

(a) 数式の問題：現在は数式エディタで入力し、GIF（画像ファイル）に変換するので結構手間がかかるし、データとしても大きくなる。HTMLの拡張であるXML（eXtensible Markup Language）のMathML（Mathematical Markup Language）が普及すれば、この問題は解決するであろう。

(b) Javaの問題：Javaは「Write once, run anywhere」を標語として掲げているが、現状は各社のJava Virtual MachineのJava実装がSunの言う100% Pure Javaでないため、機種依存性は解消していない。Netscapeは同社のJava実装

が完全互換でないとして、昨年末にNavigatorからJavaのロゴを外した。一方、MicrosoftのInternet ExplorerのJava実装に勝手な改変があると、Sunは訴え、係争中である。しかし、現在一番出来のいいJava Virtual MachineはMicrosoftのものであるという皮肉で困った状況にある。

(c) ネットワークの利用(知識と体験を共有): 電子メール、掲示板、チャット、NetNews、Webページなどをコミュニケーション手段に活用した学習形態は物理教育にも有効ではないか。例えば、広島大学の遠藤らによる「重力ネットワーク」はそのような試みの走りである。これは、各地の大学で、精密な重力加速度の測定をし、そのデータをネットワークを利用し共有する試みである。このような活動を通して、学生は、地域や時刻によって変動する物理量を連携して測定しデータを共有する重要性を認識するようになる。

(d) マルチメディアは論理的思考(収束的思考)に相応しくない。

(e) 2次元画像から3次元画像を、静止画から動画を、イメージする能力を養う必要があるのに初めから見せてしまつては学習機会を奪うことになりはしなから。

(f) 無駄を恐れない覚悟: 技術の進歩は速く、マルチメディア教材はすぐにも陳腐化するかもしれない。長期間にわたって利用される教材の製作は至難の業かもしれない。また、新たな技術を導入し改良しつづける努力が必要となる。

(g) 多極分散、多様な物理教材: CIEC以外にも、マルチメディア物理教材の製作を進めているグループがある。例えば、NEP: Network for Education of Physics (<http://www.nep.cyubu-u.ac.jp/>)、しかし、多種多様な教材が必要とされているのだから、CIECとしても製作する理由がある。他のグループとは相互に補完し合う関係を目指せばよい。

Java 言語による分子動力学ライブラリ

石井 晃 会員
鳥取大学工学部応用数理工学科

分子動力学のプログラム作りの中で自然と生まれた、質点系の運動を取り扱うプログラムをライブラリとして発表させていただいた。これはお互いに相互作用しあ

い、かつ外場からの力(重力、電場など)を入れながらN個の質点の運動を記述するプログラムで、Java 言語により、徹底したオブジェクト指向の設計思想に基づいてクラスライブラリの形で提供されている。

目的としては現場の教員の方やプログラムに興味のある学生さんなどが手軽に力学系のシミュレーションを楽しめるように、また授業に使える教材が開発しやすいように考えている。あくまでも教材・アプリケーションを開発するための素材としてのライブラリ、いわばSDKであり、お仕着せの授業形態や、使い方は提供していない。

また、一部にJavaBeansをもちいて教材を提供する動きもあるが、まだまだ現存のブラウザ自体との互換性に問題があることと、サーバー側の管理に気をつけなければならない点、また、JavaBeans自体が必要なダウンロードサイズの巨大さからWWW上と言うより単独のアプリケーションとして用いられる方向である点などを考慮し、今のところ当該ライブラリをJavaBeansとして提供することは考えていない。



科学を楽しむ

酒井 敏 氏
京都大学総合人間科学部地球科学

京都大学では、昔の教養部時代から非常勤講師に応援を願って、比較的小人数で地学実験をおこなってきた。わかっていることやルーチン化したものを避け、失敗を恐れずまだやったことのない実験にチャレンジし、成果を問わない方針で行った。教員はコメントをなるべく控えて学生が受け身でなくやる気を出すまで待つ姿勢をとった。

例えば、1905年にEkmanが海の表面に風が吹いても風向き方向に水が流れないことを発表して以来、「Ekman螺旋」現象として数式では証明できても誰も螺

旋を見たという記録がないので取り上げてみた。実験は1、2回生の学生がおこなったが、後に理論のわかる院生が実際に螺旋を見て驚くこととなった。(内容紹介は略)

その他実験のタイトルとしてフーコーの振り子と慣性振動、渦の生成・消滅、K-H不安定、回転対流、QBO、傾圧不安定、Kelvin波、内部重力波、Salt Finger等。昨年、これらの過去の実験をまとめたものをホームページ上にアップし、かつCD-ROMにして生協に販売を依頼した。動画などを含む650MBもの重いデータなので、Web上から電話回線でダウンロードするより安価である。とにかくサイエンスを楽しむというスタンスで、大学から世の中に情報を発信してみた。中高生がWebをみて興味をもってくればという程度の期待はあるが、効果は未知数であるし大学の教育にフィードバックもされていない。

大学では依然として学生の問題意識を引き出すことが難しく、だんだん学生の考えていることが解かりにくくなっている。基礎的知識の不足もあるが科学的思考法をそれまであまりしてこなかったことも問題としてあげられる。科学は学生にとって面白くないものになっている。他に興味の対象がたくさんあり、次々に開発されそれらを使いこなすのに精一杯でこのようなものがあつたらいいなという動機が生じないこともあるかもしれない。

関連した話として、今回大学からの情報発信として、学会誌をマルチメディア化することを考えた。日本流体力学学会で論文をマルチメディア論文として募集しホームページとCD-ROMで発表する。専門家以外で興味をもった人が学会が提出する論文の内容を楽しめるのではないかととの試みである。(文責事務局)

参照：CIEC会誌「コンピュータ&エデュケーション」

Vol.4 P.51 '97PC Conference 予稿集 P.173

CD-ROM(実験室の中の空と海 地球流体基礎実験集)

学ぶ道具としてのネットコンピュータ

小西 浩之 会員
滋賀県立日野高等学校

1. 日野高校は理科のデパート

日野高校は琵琶湖の東、鈴鹿山脈の麓に位置する、豊かな自然に囲まれた高等学校です。蒲生郡唯一の高等学校として、普通科、商業科を併設し、幅広く様々な生徒を受け入れ、地域に根ざした教育活動を行っておりま

す。

本校の理科教育では生徒の興味関心・進路目標に即した教育ができるように、幅広く様々な科目を開設しています。以下はその内容です。

総合理科(1商、2商) 「新しい学力観」で登場した科目

物理I A(3普文)、物理I B(2普進学理)、物理I I(3普進理)

化学I B(2普進理)、化学I I(3普進理)

生物I B(1普進学)、生物I I(3普進理)

地学I A(3商、3普選)

環境(3普選) 日野高校オリジナルの「その他科目」

「環境」は教科書のないオリジナル科目で、毎回、実験・実習による授業展開を行っています。

理科の教員すべてがスクラム組んでそれぞれの専門分野を越えた取り組みができる様に留意しています。特に、平素から「総合理科」、「環境」ではチームティーチングで授業展開も行っています。

2. 「理科離れ」考察

「理科離れ」が言われるようになった背景を少し考察しておきたいと思います。

(1) 夢が持てない!

私(1961年生まれ)が子どもの頃はまさに「科学技術万能、それ行けGoGo!」の時代で、大人社会ではアポロによる月面探査、万国博覧会、また大船団方式捕鯨も盛んに行われていました。いきおい、子ども雑誌の付録もそれに係るものであり、実に夢のある幸せな時代でありました。かくいう私も、大きくなったら「お茶の水博士」の様な立派な科学者になろうと思ったものです。それに比べると現代社会はあまりにも子どもにとっては「不幸」な時代なのかもしれません。

(2) 経験・体験が少ない!

“汗をかきながら遊び道具を作る”といった経験や、“泣きべそかきながら九九を覚える”といった体験が圧倒的に不足していると思います。ここ15年ほどの高校生を見てきていますが、このことは最近特に顕著であると感じています。

(3) たちまち必要がない!

就職、進学いずれにしても理科が試験教科に課されないことも多く、現実的な高校生にとってはたちまち必要のない教科となってしまっています。

しかし、理系大学に進学した卒業生は必ず言うセリフがあります。「もっと物理を勉強しておくべきだった!」と。。。 運動方程式を一度も解いたことのない高校生

が機械工学科に進学してしまう悲劇は、想像するだけで実に恐ろしいです。しかし、そんな先輩の声をいくら伝えたところで、受験生にとっては目下の問題で忙しく、『それどころではない』というのが悲しい現実です。

3. 学ぶ道具としてのコンピュータの役割

本校の理科では実験・実習を中心にした「いわゆる理科らしい理科教育」を展開しています。その中でコンピュータも「学ぶ道具」としての役割が与えられ適材適所の活用がなされています。

HyperCard (+I.A.C.), WWW (+C.G.I.), FirstClass, InteractivePhysicsII、実験計測システムがその環境であり、これらはネットワークを積極活用した学習環境となつています。(この当たりの具体的事例を会議で紹介しました)

コンピュータが最も力を発揮するのは「表現活動」であり、主体的な学びを目指す学習デザインには欠くことのできない存在となっています。生徒自ら、プレゼンテーションやネットワークコミュニケーションを行うことにより、他者とのかわりの中でリアリティを持った学びを実現することができるのです。

もちろんコンピュータは「理科離れ」を防ぐ全知全能の存在ではありません。さりげない脇役として、学習者の「新たな表現手段」、「自己実現の場」として働いてくれているというのが今回の報告であります。

CIEC 第6回研究会に参加して

若林 靖永会員
京都大学大学院経済学研究科

私の専門はマーケティング、社会科学系ですが、自然科学教育におけるコンピュータ活用はすでに大学、小中高、様々な分野で展開されているのに驚きました。「理科嫌い」「理科離れ」が問題になり、多くの関係者が理科教育の革新に向けて頑張っているんだということをおぼろげに感じました。

その際の問題は、大きく分けて、自然科学に興味を持たせる(学習意欲の形成)レベルと、わかりたい人がちゃんとわかる(理解の形成)レベルの双方において、コンピュータがどのように貢献できるか、の2つがあるようです。ただ「わかる」って何だろうと考えるとむずかしくなります。論理的にわかるということと、実験その他で検証されるプロセスを通じてわかるというのがあつてと思います。どちらの「わかる」を支援するのか、2

通りのコンピュータ活用の方向があるようです。一番つまらないのは、答えが正しいかどうかを点検するだけのコンピュータ教育ソフトですね。これは解答が出せるかどうかは点検しますが、「わかっているか」どうかは点検しないと思います。

マルチメディアを利用すると、おもにグラフやアニメにより直感的にわかるというようなことも紹介されました。その場合、数式を見てどういうグラフになるのか、自分の頭でイメージできないで、コンピュータに頼る人ばかり増えるのも困ったものだと思います。このあたり、ワンクッション置いて、ま自分の手で書いてみる、日本語で表現するといったような手続きを経た上で、コンピュータを利用しないと、結局、死んでいる知識を蓄えていくだけになるような気がします。それとも、電卓を使うことが当たり前になり、九九を必死に覚えるようなことはどうでもいいという方向が望ましい変化なのでしょうか。

コンピュータ・シミュレーションの有効性もわかりませんが、何よりも知的好奇心、疑問を持って工夫して実験してみることが自然科学についての興味と理解を広げる基本ではないかということも強く感じました。

最近、『カエルの鼻、たのしい動物行動学』(石居進著、八坂書房)を読みました。この本などの面白いところは、科学的探求の基本である、現象を観察し、疑問を持ち、仮説を立て、それを検証する実験方法を企画しデータを収集し、分析・検証をすすめていくという一連のプロセスが示されている点であり、こういうのは推理小説を読むように楽しいものです。

マルチメディアで自然現象、実験プロセスおよび結果を見せることができるというのは、コンピュータの素晴らしいところ。実験は自分で工夫してやってみるのが一番ですが、効率を考えるとそれをマルチメディア教材で補うというのは有効なようです。

コンピュータ活用は両刃の剣。活用を注意深くしないと、逆にイメージ貧困の再生産になりかねない、単純なゲームのような理解になりかねないという危惧をも強く持ちながら、他方で、コンピュータ活用そのものが探索的であるような工夫を通じて、イメージを育て自然科学を好きになり、自然科学的方法を体得することが促進されることを期待しています。

今回は新しくCIEC理事になられた方々に自己紹介を兼ねて、CIECに対する抱負や身近な話題をご紹介します。をいただきました。

新理事の抱負

指宿 信 理事

鹿児島大学法文学部法政策学科

専門は、法律学、その中でも刑事訴訟法という分野ですが、4年ほど前から法律関連情報をインターネット上に展開する可能性と、その学問・教育への利用可能性について興味を抱き、更に法律学におけるコンピュータ・リテラシーや、研究方法論へのネットワークの影響を考えてきました。

そうした関心から、96年に『法律学のためのインターネット』（日本評論社）を書き、法律学の分野でのネットワーク利用のいわば啓蒙書を出しました。その続編として、この7月には『インターネットで外国法』（日本評論社）という書を編み、世界の12の国や地域に関する法律関連情報のリサーチに関する解説書を出したばかりです。いまは、同じコンセプトで書かれた本が世界にまだないため、世界各国から協力者を集めて、同種の書物を米国から出版する準備を進めているところです。

アメリカは早くからコンピュータ・データベースが法律学に進出したお陰で、コンピュータ支援による法学学習はロー・スクール（法科大学院）での基礎科目のひとつとなっているほどです。わが国では、ようやく教員が電子メールなどを利用し始めた段階で、教育利用もこれからというところです。さしあたり、小さな一歩として、「法情報論」といった科目を新設し、同僚と共に次世代の法律学教育の実践を試みています。

最近は、とかく話題となることの多い、サイバースペースに関する法律問題にもコミットしています。97年の夏から一年間、米国はシカゴで研究に従事し、サイバースペース上の猥褻情報への規制をめぐる法的問題や、暗号化ソフトウェアの暗号鍵強制的開示方式をめぐる法的問題などにつきリサーチをしてきました。同時に、Cyberlaw Scholarsという世界中のサイバースペース法に関心を持つ研究者のネットワークを組織して、国境を越えたグローバルな法的問題を研究できるグループをつくり、各国の規制状況を研究者サイドから分析するプロジ

ェクトを立ちあげただけです。

ハードウェアやソフトウェアそのものについては素人なのですが、その先に、とりわけサイバースペース上に生まれるものをどう法的に考察するのかとか、社会や教育現場でどう活用あるいは規制するのか、といった視点からCIECにかかわることができればと思っております。

大岩 元 理事

慶応義塾大学環境情報学部

このたび、CIECの理事を勤ることになりましたので、一言御挨拶いたします。

私は1978年に豊橋技術科学大学が開校して以来、ソフトウェア技術者の育成を行ってきましたが、1992年に現在の慶応大学湘南藤沢キャンパス（略称SFC）に転任してからは、一般人に対する情報教育が活動の中心となっております。

豊橋では、オリジナルなソフトウェアを開発できる学生を育てることを目標にしましたが、14年間に少くとも4つのソフトを学生が作ってくれました。最初に出来たのは、5時間の練習で英文タイプが打てるようになる練習システムで、東大をはじめとして多くの大学で使っていただくことができ、岩波でPC9801用に商品化されました。さらに最近、日経BP社から発売された「必ず打てるキーボード」（CD-ROM付9800円）もこれに基いて開発されたWindows95ソフトと解説書です。

続いて、カナ漢字変換をしないで漢字が入力できる日本語入力システムが開発され、EPSONから「タッチ16」という商品名で発売されました。しかし世に出るのが早すぎて普及しませんでした。それでも利用者、特に60歳過ぎの方々には評判がよいので、再度普及に挑戦したいと考えています。

次に開発されたのは、発想支援システムKJエディタで、これも商品化されましたが、未だ日本では発想が尊重される社会になっていないために、普及するに至っていません。これは、KJ法を支援できるカード操作システムですので、子供達に使ってもらうことを考えています。

最後に豊橋で開発されたのは、都市景観シミュレーションシステムです。これも世界中に類似のソフトが無いので専門家の評価は高いのですが、3次元データの標

準化が成される前に作られたためにデータ・フォーマットの互換性が無くて、現在では使われなくなってしまいました。

よいソフトを開発しても、それが理解できる利用者がいないと利用されないことをこうした開発経験を通じて痛感しました。CIECではコンピュータを使いこなせるユーザーを育てるにはどうしたらよいかを研究して行きたいと考えています。

奥山 賢一 理事

山梨大学教育人間科学部附属小学校

今年度から理事をさせていただくことになりました山梨大学教育人間科学部附属小学校の奥山賢一です。CIECとの関わりは、1995年のPCカンファレンスからで、小学校の教員としては珍しい関わりかもしれません。どうしても大学生協が母体となっているので、公立小中学校の先生方がCIECの情報にふれる機会が少ないのでPRに努め、少しでもカンファレンスに多くの方が参加されるよう活動を行って行きたいと考えております。

私は、1994年から「インターネットの教育利用」について実践研究を行っております。小学校ですから技術的に大したことはできませんが、子供たちがインターネットを利用し、人の輪を広げていく中で「コミュニケーション能力の向上」や「モラルの育成」を図ってくださることを願っております。これまで「電子メールを活用した授」を社会科や学級活動で行ってきました。ちょうど1994年当時は、大学でもインターネットの教育利用が始まった頃で、研究会や学会でレポート発表を行うと、「大学生より小学生の方がリテラシーがある。」とか、「リテラシー育成だけでなく授業として利用されている。」と感嘆されることが多かったのですが、もっと段階的なリテラシー育成のカリキュラムを構築できないか考えております。できることなら、小中学校の内に「読み・書き・そろばん・コンピュータ」のように基礎的基本的な技能・モラルを身につけ、高等教育では、その内容に応じた利用を図っていければ良いと考えております。もちろん小中学校段階もただ技能やモラルを指導していくのではなく、学習活動の中で活用しながら身につけていくことを行うことが必要だと考えております。

この4月に同僚の先生が上海日本人学校へ転任し、情報主任になったので、上海へ5月と8月に行って来まし

た。情報教室の新設のお手伝いを行っております。ネットワークの基本は人であります。この人と人とのつながりを助けるネットワーク活用を推進していきたいと思えます。

小西 浩之 理事

滋賀県立日野高等学校

もうかれこれ4年前、当時堺市立科学教育研究所にお勤めになっておられた村上優先生より『オモロイ奴があるでえ〜』って感じで大学生協連さんにご紹介して頂き、私は“PCカンファレンスの門”をたたいてシマイマシタ。

94年度愛知県産業貿易館、95年度東京都立大学、96年度早稲田大学、97年度同志社大学と連続4回のPCカンファレンスで発表させて頂くばかりか、なんと九州地連PCカンファレンスや物理プロジェクトの会議まで出させて頂いております。さらにさらに、ある日届いた1枚のハガキにチェックマークを入れたおかげで、CIEC設立発起人まで名を連ねさせて頂きました。

PCカンファレンスを中心とするCIECの活動はアカデミックでありながらも優しい雰囲気を持っており、私のようなガサツ者でも参加させて頂ける、居心地の良い“学び広場”であります。生涯の仕事として実践的研究者であろうと志す私にとってかけがいのない“存在の場”なのです。

日野高校では6年前より「学ぶ道具としてのネットワークシステム」をコンセプトに様々な実践を行って参りました。外部への接続は1本のアナログ電話回線だったわけですが、生徒とともに築き上げた校内ネットやイントラネットサーバも含めてフル活用し、『そこまでやるかあ〜』とあきれかえられるような活動を行って参りました。100校プロジェクト実践校のインターネット活動を横目で見ながら、「貧しいときこそ、工夫でそれを克服し、よいものを生み出すチャンスだ!!」と心して頑張ってきたのです。

「武士は食わねど高楊枝」もそろそろ限界に達しかけていた本年度、幸運なことに2つの文部省予算を頂いて光ファイバーとISDNを一挙に手に入れることができました。さらにそればかりかコンピュータ教室のマッキントッシュも機種更新と、連発花火の大炸裂です!!最高のおぜん立てをしていただいたわけですから、これから勝負と気を引き締めております。嬉しいような怖いような気持ちが正直なところ。いきいきとした学び環

境がコーディネートできるよう励みたいと思いますので、これからもどうぞよろしく願いいたします。

武沢 護 理事
神奈川県立教育センター

この夏、筑波大学で開催された ATCM (数学と数学教育におけるテクノロジー利用の国際会議) に参加したところ、偶然、都立大学のト部先生にお会いした。理事の件について少し話をし、その場はとりとめのない会話をかわしたただけでお別れした。僕が理事立候補するはめになったのは、実はト部さんが「黒幕」? だったと、事務局の仲田さんから聞いて知っていた。ト部さんにはいろいろお世話になっていたもので、まあしかたがない。立候補というのは当然、落選もあるのだし、とりあえず受けることにした。結果は、幸か不幸か当選。でもまあ、日ごろ、CIECの活動には興味があったし、中等教育に関わるものとしては、大学教育を含めた高等教育とは連携しなくてはならないと思っていたので、現在は、CIECへ何かお役に立てればという心境である。

さて、ト部さんとは、現在の勤務先である県立教育センターの高等学校数学教育研修講座の担当者として、何回か数学の講師をお願いしたことがあり、面識があった。大学の先生として、研究だけでなく数学教育にも深い理解があるかたで、毎回、高校教師相手に興味深い講義をされる。このような機会は貴重であり、重要であると思っている。また、先のATCMのような会議も組織されるようになり、さまざまな国の人たちとも本質的な議論をできる場が増えてきた。

いま、小中高の学校現場は新指導要領に向けて、例えば、「生きる力」、「総合的な学習の時間」であるとか、国際教育、情報教育、環境教育など、新しい学習スタイルや学習内容が目白押しである。特にコンピュータの利用というと、「追い風」である。コンピュータ教育や情報教育は「花盛り」の観がある。

僕自身、中等教育に身をおく立場から、この辺の事情をふまえながら、CIECの活動に参加したいと思っている。

立田 ルミ 理事
獨協大学経済学部

獨協大学の立田ルミです。会長の奈良先生に、1995

年にテキサスでお会いしたのがきっかけで、CIECに入ることになりました。当時、イリノイ大学で長期海外研修していましたが、イリノイ大学で開発したMosaicをどのように教育に利用してゆくかということが学内のあちこちで議論されていました。私の属する獨協大学は外国語学部、経済学部、法学部の3学部からなる文科系大学で、学生数は大学院生と外国人学生を含めて約9000人です。1968年よりコンピュータを導入し、コンピュータ教育を行ってきました。私は経済学部経営学科に属しており、プログラミング論、マルチメディア論、情報処理概論などを担当しております。また、情報センターの主任研究員も兼任しております。情報センターがまだ電子計算機室と呼ばれていた時からアシスタントとして勤務してありましたから、コンピュータとの付き合いも随分長くなります。また、私が大学の数学科に入学した時にちょうど電子計算機が導入されていますので、大学入学もコンピュータと深かかわっていたこととなります。入出力装置としては、紙テープの時代から、DVDの時代までを経験したことになります。今後どのような新しい技術が生まれるのか、楽しみでもあります。

獨協大学は、1996年秋に学内LANを再構築すると同時に、約220名の教員と約180名の職員に一人1台のコンピュータを導入しました。ネットワークが研究室と教室と事務局と繋がったおかげで情報のやりとりが随分簡単になり、あちこち歩き回らなくてよくなりました。授業で利用する教材やデータは研究室からネットワーク上のエリアに置いておいて、各教室からそれらを取り出しています。また、教職員のコンピュータトラブル対処のために、情報センターではヘルプデスクを新たに設置しました。現在はトラブル対処に追われておりますが、ここが教育用ソフトの開発のアシスタントをしたり、先生方へのコンサルタントができるようになればよいと思っています。これらのコンピュータを教育にどのように生かして行くのか、今後の課題です。

野澤 和典 理事
立命館大学経済学部

この度理事の仲間入りをした野澤@立命館大学経済学部です。どうぞよろしくお願い致します。1998年3月まで勤務していた前任校には大学生協がなかったのですが、1996年当時のCIEC設立準備段階では「呼び掛け人」の一人として、微力ながら設立に協力しました。し

かし、種々の事情のため理事会などへ立候補することは躊躇っておりました。昨年度から状況がやや改善されましたので、不十分な貢献度で反省しておりますが、海外活動委員会委員の一人として参加してきております。会員の専門分野が多岐に亘り、大きな学術団体のリ・ダ・シップをとっていくのは大変でしょうが、理事会構成メンバーの一人としてできる限りの協力と貢献をしたいと考えております。

私のコアなる専門分野は「英語教育学」ですが、関連諸領域として、応用言語学・教育工学・異文化コミュニケーション学という学際的アプローチをしながら研究する分野もあります。現在の主たる研究は、科研費の基盤研究による共同研究としての「日本人英語学習者コ・パスの構築と第二言語習得研究」、BKCキャンパスで新展開をしている経済学部・経営学部の英語教育カリキュラムの一部を担う「Web-based CALL Programの開発と研究」、日豪文化比較を中心とした「日本人の異文化接触と適応・不適応の研究」です。

また、英語教育の学術団体の一つでもオンライン・ジャーナル (CALLElectronic Journal) を発行し、創設当時からその編集主幹をしていますので、世界中のCALL研究者たちとの交流をしています。「インタ・ネット」という魔物にコントロールされている訳ではありませんが、ワ・カホリックな毎日の生活の中でもサイバ・スペースへの旅立ちは欠かせない状態です。

何事マイペースで楽天的な性格を最大限出しながら、「今できることを実行する精神」で挑戦しています。

松原 真砂子 理事

千葉敬愛短期大学初等教育科

『一聞いたら、十わからなくなる』(佐伯先生がどこかでお書きになっていました)状態の私が巡り会ったのが、CIECです。CIECは、いろんな分野の方々がいらっしやることで、他には類をみない魅力ある学会になっています。

昨年は、奈良久先生に同行させていただいて、韓国清州市の国立忠北大学で開かれた『教科教育方法に関する第一回国際会議』に出席しました。今年5月には、その時のご縁で、忠北大学に、国際交流基金のフェロシップによる調査の受け入れ先になっていただきました。9月30日～10月1日に開かれた第二回国際会議にも行ってきました。忠北大学教育学部情報教育学科のOkhwa Lee先生と共同で、韓国のコンピューター教育に

関する報告を書きたいと思っています。

CIECには英語に堪能な方が大勢いらっしやいます。将来韓国と共同で国際学会がひらけたらと、そんな希望もっています。

東アジア地域研究が専門ですが、やっと教室で液晶プロジェクターが使えるようになりましたので、学生が興味をもてるような学習・教授デザインに挑戦してみようと思っています。

新会員の方のひとつことや、海外からの報告、身近な話題などをご紹介します。皆さんからのお便りをお待ちしております。

はじめまして

「心の福祉と情報支援」

伊藤 あづさ 会員

東北福祉大学社会福祉学部

この度仲間入りをさせていただきました。10年前障害者職業訓練校でのOA機器操作指導からコンピュータ教育に携わることになりました。正真正銘の「文科系人間」です。

その後8年間専門学校で情報処理試験対策を手掛け、今春より大学で専任教員として情報処理を担当しております。「心の福祉と情報支援」がテーマです。学生は大半がコンピュータ初心者。「知っている人」から「出来る人」さらには「支援できる人」に育てたいという希望を持っております。よろしくご指導ください。

海外報告

「マレーシアの MultiMedia University」

黒田 景子 会員

鹿児島大学法文学部

1998年8月、マレーシアとシンガポールで研究調査を行いました。テーマは東南アジアの歴史意識の分析にかかわるものだったのですが、たまたま、文化行政などにかかわる知己から、マレーシアに新設になった大学

CIEC活動報告

で、Multimedia University (Universiti Telekom) を訪問する機会を得ました。

この大学は去年新設され、現在はマラッカにあるテレコム大学 (Universiti Telekom) 内のキャンパスに間借りしていますが、来年早々に、首都クアラルンプル郊外の新首都計画地域のCyberJayaに移転予定で、キャンパスの建設などが急ピッチで行われています。このCyberJayaというのは、マレーシア政府の肝いりプロジェクトMSC (Multimedia Super Corridor) Universiti Telekom計画の主幹をなすもので、要するに、大学・研究所・首都機能を光ファイバー網で結んだ、総合的情報網都市のことです。マレーシアでは空港がこの7月にその近くに移動し、E-mail やコンピュータを空港利用者がすぐに利用できるようなシステムが設置され、国民のコンピューター利用教育に対してなみなみならぬ意欲を伺わせます。この数年、マレーシアは官公庁から大学企業もインターネットによるサービスが充実してきましたが、マルチメディア大学というのは、いままで海外での教育に頼っていたコンピューター技術者を、自国で養成する目的と、海外の研究期間・企業との連携をはかった積極的な教育プログラムをもつことを目的としています。

訪問したときには、欧米からの帰国組らしい英語ペラペラのマレー人教授が、Onyx2でクアラルンプールのWalkingThrough Dataを操作して大学の概要を説明してくれる横出、学生たちがCGアニメーション製作の課題にとりこんでいまして、その成果もホームページでみせていただき、しがたい文系の研究者(わたくし)はただただ仰天してみているだけであります。

1997年の報告で台湾・韓国での大学情報教育の話題がでていましたが、国民の英語理解の条件がよいマレーシアや、Virtual MusiumのEducation Programに積極的なシンガポールなどの事例についても、海外機関とのコンピューター利用教育という面からは注目必須であると感じました。

なお、Universiti Telekom (Multimedia University) は <http://www.unitele.com.my/> でみられます。

活動日誌 (6月～9月)

- 6月 5日 総会開催公示
- 6月13日 ソフトウェア委員会
- 6月15日 ニュースレター別冊発行
(第4回研究会報告・三宅氏、大岩氏)
- 6月15日 役員選挙公示 / CEC訪問
- 6月22日 会員発送 (議案書、総会開催公示、役員選挙公示、
ニュースレター第4回研究会報告)
- 6月25日 書籍化で光陽印刷と打ち合わせ。著者発送。総会
議案確定予定
- 6月30日 立候補締め切り
- 7月 1日 投票用紙等会員発送 (表書き、議案6つ、書面議
決投票用紙、投票袋、ニュースレター別冊)
- 7月13日 シンボ書籍化最終校正作業。
- 7月19日 大学生協政策討論集会 プースを出す
- 7月22日 投票締め切り7月22日消印
- 7月24日 開票
- 7月23日 ニュースレター別冊発行
(第5回研究会報告・小林氏、赤堀氏)
- 7月25日 書籍「教育におけるコンピュータ利用の新しい方
向」発行 (97PCカンファレンスシンポジウム記録)
- 7月27日 97年第2回理事会
- 7月28日 98年定例総会 (97年事業活動報告、98年方針、
役員改選)
- 8月10日 CIEC事務局の事務局員構成と仕事量について話合
- 9月 4日 CIEC拡大事務局会議 / ニュースレター別冊 (第
5回研究会報告、総会報告) 発送
- 9月11日 science@ciec.or.jpのMLを設定
- 9月16日 書籍「教育におけるコンピュータ利用の新しい方
向」、これまでのパネリスト、会誌執筆者へ贈呈、
大手新聞社、教育系新聞社に贈呈
- 9月11日から10月5日
運営委員会 (予算執行とプロジェクト活動について
メーリングリストにて)
- 9月28日から10月8日
理事会 (99PCカンファレンス実行委員選出)
- 9月29日 大学図書館に会誌バックナンバー贈呈
(ただいまの会員状況 個人会員593名、団体76団体、会員拡
大キャンペーン中)

(これ以外にこの時期はPCカンファレンスに関する動きが半分以上をしめす)

- 6月 2日 ポスター出来
- 6月 5日 学生版リーフ出来
PCカンファレンスニュース6号
- 6月16日 PCカンファレンスニュース7号
- 6月18日 PC連合会内会議
- 6月23日 企画調整会議

6月25日	PCカンファレンスニュース8号	会誌編集委員会	-----赤間理事より提案
7月13日	打ち合わせ。大谷氏来細かい打ち合わせ	カンファレンス委員会	-----三根理事より提案
7月10日	PCカンファレンスニュース9号発行	2) 特記事項と質疑あり	
7月14日	PC連合会内会議。事務用品発注準備	2 収支決算報告および監査報告	
7月17日	PCカンファレンスニュース10号発行	1) 収支決算報告-----松田理事より提案	
7月18日	企画調整会議	2) 同監査報告 -----朝岡監事よりすべて帳票通りで、問題ない旨報告された。	
7月21日	PCカンファレンス内局打ち合わせ会議 イブニングトーク参加希望者への発送	3) 報告と説明があった	
7月23日	名簿完成、しおり原稿あつめ完了	3 1、2 についての . 討論のポイントは以下	
7月25日	チャーター便荷物積み込み	1) 会員拡大について	
7月27日	企画調整会議	2) サブサーバーの導入と設置場所について	
7月28日から 30日	PCカンファレンス当日	3) ソリューションセミナー	
8月 3日	ブース出展社お礼状とアンケート発送	4) 企業との連携について	
8月 6日	広告用フィルム残り返却 / 機材担当者と反省会	討議を受けて議案 1 と議案 2 を確認した。	
8月 7日	日福大関係者挨拶送り	4 役員選挙規約 (理事会案の確定)	
8月12日	分科会まとめを若林先生に報告 参加者人数のまとめ	1) 役員選挙規約の運営委員会案を大野理事より提案、確認した。	
8月18日	郵便振替確認。98PCC経理、受付反省まとめ	2) 選管の任命を会長に一任した。	
8月20日	98PCC参加費生協に確認のFAX	5 予算案について確認した。	
8月24日	ブ-アサクトまとめ、宣伝まとめ、	1) 運営委員会案を松田理事より提案	
8月25日	98PCC連合会内会議	6 総会議案について	
8月28日	カンファレンス企画調整会議	1) 運営委員会案を若干修正して松田理事より提案し、確認した。	
9月 1日	生協にPCCの請求をおこなう	7 その他、以下確認した。	
9月 3日	98PCカンファレンス実行委員会	1) 会員拡大の取り組みについて	
9月16日	98PCカンファレンスまとめ確定	2) カンファレンスの次回開催校について	
		8 今後のCIECの進め方について自由討議を行った。	
		1) 会員拡大について	
		2) 周辺での活動紹介	
		3) CIECの活動方向	
		4) その他	

97年度 第1回理事会報告

日時 1998年5月31日(日)
 場所 大学生協会館2階会議室(202・203)
 出席 奈良、矢部、松田、赤間、板倉、一色、石川、上村、
 卜部、大野、籠谷、小林、榊原、匠、田中、田中、
 筒井、鳥居、中村、野田、松浦、三根、宮本、森、
 湯浅、吉田
 監事 朝岡、倉田、今國
 オブザーバー 宮本(富士ゼロックス株)
 事務局 仲田、朝田、羽田
 欠席 阿部、荒牧、小野、佐伯、佐藤、辻本、和波、若林
 吉江、松本、
 議長: 奈良 久

議事

- CIECの97活動振り返りと3年目の活動に向けて
 - 活動報告と方針
 - 全体的な活動について -----湯浅理事より提案
 - 専門委員会の活動について
 - ネットワーク利用委員会 -----矢部理事より提案
 - ソフトウェア委員会 -----一色理事より提案
 - 国際活動委員会 -----松田理事より提案

97年度 第2回理事会報告

日時 1998年7月27日(月)
 場所 日本福祉大学 知多半田キャンパス
 出席 奈良、松田、矢部、赤間、石川、板倉、上村、小野
 榊原、籠谷、小林、匠、田中(一郎)、田中(寛)
 筒井、鳥居、松浦、宮本、三根、森吉田、若林
 大野、野田
 監事 朝岡、今國
 事務局 本田、仲田
 欠席 阿部、池田、一色、卜部、佐伯、佐藤、中村、松本、
 湯浅、吉江、荒牧、(株)コンピュータウエーブ、
 アップルコンピュータ株式会社
 議長: 奈良 久

議事

- 総会準備について

ML 討論

- (1) 議案の事前投票の評決について
 - (2) 意見用紙について
 - (3) 議案提案内容の追加事項について
 - (4) 1998・1999年度CIEC役員(会長・副会長・理事・監事)選挙について
2. 総会の運営について
- (1) 受け付けと総会成立要件の確認方法
 - ・受け付け 田中(寛)理事、森理事
 - ・総会成立 本人出席、書面出席、新たな委任状出席で確認
 - ・賛否 会員証をもって挙手で確認
 - ・選挙の方法 選挙結果の報告を承認する。
 - ・議長団選出方法 推薦+立候補
 - 理事会推薦メンバーを決めた-----赤間理事、匠理事
 - ・提案分担
- | | |
|----------|--------|
| 議案 1、 | 矢部 副会長 |
| 議案 2.3.4 | 松田 副会長 |
| 監査報告 | 朝岡 監事 |
| 議案 6 | 大野 理事 |
| 議案 7 | 綾 選管 |
3. 議事の運営
(別紙を確認した。略、総会報告参照)
 4. PCカンファレンスについて
 5. 98年度の活動についての理事会内ワーキンググループについて
 6. その他

CIECのメーリングリストはCIECの活動全般について会員相互に語り合う場です。

現在の登録者数は約150名。会員全員ではありませんが、会員に広く伝えて関心のある人がそのテーマで語り合う場です。

ここで語られたテーマが、CIECのなかでグループとして育ったり、研究会になったり、また、つながりのある他の学会との連携になったり発展しています。

学生会員にとって、新入会員にとって、さまざまなアドバイスをもらえる共同学習の場です。

今回は98年5月末から98年9月末の4ヶ月間(969から1091まで)です。

このなかで話題になった事をいくつか御紹介します。

WIDE university (ciec973)

WIDEでは「WIDE大学」と銘打って、WWWシステムを利用して高等教育を行うための実験的プロジェクトを立ち上げています。ここでは、いくつかのオンライン講義が1998年4月から開講されています。現在開講中の講義は、「コミュニケーションネットワーク論」、「情報処理IS」、「メディアリテラシー」、「計測情報処理」、「情報ネットワーク論」となっています。(推薦によりCIECホームページにリンクしました。)

98年度 第1回理事会報告

日時 1998年7月28日(火)
場所 日本福祉大 知多半田キャンパス
議長 奈良 久

議事

1. 運営委員の互選
CIEC会則27条にもとづき、理事の中から以下の10名を運営委員として互選した。

赤間 道夫	一色 健司
板倉 隆夫	小野 進
匠 英一	筒井 洋一
中村 彰	湯浅 良雄
三根 浩	大野 清貴

運営委員会は、会長・副会長と上記運営委員の13名で構成されます(CIEC会則28条)。

2. その他

(議事録は事務局に保管されています)

専門分やの大学教育を相互に研究する必要性

(ciec976、977)

経済学教育学会編の書籍紹介を糸口にして上記問題意識が展開されました。

PCカンファレンスに関わって

総会について(1033、1034、1035、)

イヴニングトークについて

(ciec1019,1020,1028,1029,1037)

「これからの情報教育について考えよう」

(1038,1040,1044から46、)

このテーマの交流会報告とそれにとまなう書籍紹介、報告者に対する問題提起がすすみました。

学生による相互批判の有効性(ciec1047、48、51、52、53、)

・出された課題に批評がつけられなければやったかいもないし、実力になりません。

しかし、大学の専門教育ならともかく、教養教育、共通教育の場合は受け持つ人数が多すぎて批評をつけるのは困難です。

富山大学「言語表現」やSchoolOfInternetの、インターネットを用いて学生に相互批評をさせるという方法は課題に批評をつける方法として有効な手段になりえるでしょう。ですが・・・。

・大規模授業の場合には常に問題になる点だと思いません。これらの障害を越える方法として、

1) 添削に関する経験や技量のあるTAを雇用することが不可欠でしょう。私のクラスは二十名の少人数ですが、大人数になると優秀なTAの存在抜きには考えられません。

2) 同輩集団による相互添削の弱点は、ご指摘の通り、批評眼に対する信頼性の問題です。これに対しては、教官があらかじめ批評のポイントのある程度指定しておくとかかなり適切な批評になります。

・人間というものは、自分でできなくても、批評するだけならできるものです。今の若者は批評されることを恐れているので、批評された体験をすることは本人のためになると思います。

批評を受けた、そのことが良い体験なのであって元の作品に手を加えて、何でも高いものに直すのは難しいかもしれません。むしろ、(ゼロクリアして)初めから新しいものを書いた方がよいこともあるでしょう。

具体的に、どう批評して、それに対してどう書き直したかということ筒井先生から送られてきたレポートに書かれてありました。ああいう資料が整備されてくると、みんな参考になります。

・的を得た指摘だと思います。私も授業では学生に新しく書き直しを求めるのか、それとも微調整にとどめるのか迷うことがしばしばです。作品というのは、出来不出来は別にして、一応の筋道があります。筋道が根本的におかしい場合は新しく書き直しを求めた方がいいと思います。それに対して、微調整で済む場合には、おおよその筋道が通っている場合です。しかし、上記の二つの区別をするのはなかなか難しいですし、個別に判断するしかないと思います。その際の判断基準をマニュアル化することで、他の教官との経験の交流をしてみたいですね。また、コンピュータがそれをどう支援するのも考えないといけません。ただ、作品が完成してからそれを批評するよりも、むしろもっと早い段階で学生にアドバイスした方が効果的です。今まで教師というのは、学生が提出してきた完成品に対する評価をしてきましたが、

学生の能力を上げるには、構想の初期段階にアドバイスする方がより効果的だと思います。鉄は暑いうちに打てです。

・これをできるのは少人数教育だからですね。そして熱心な先生とそのアドバイスを真剣に受け入れる学生。良い教育は先生と学生、両方が力をあわせないとできません。(片方だけ努力してもだめ)

・相互批評はSOI (SchoolOfInternet) ではまだ実験の段階のようですので、ベストな方法としてはまだ確立されていません。これは個人的な意見ですが、もし実現するとしたら、批判の中身よりむしろそれによって生徒同士でのコミュニケーションがさかんになる事の方を期待したいです。それによって議論が深まるきっかけになればと思います(実際にはなかなか難しいようですが)

紀要の学内審査 (ciec1060-64)

幾つかの国立大学、公立短大などの様子をうかがうと、学内審査はしてないところが多いようでした。特に文系で審査しない事が多いようです。皆さんのところでは?

学生のホームページ (ciec1069-74)

会員の属する大学でホームページを開設しているところがありましたら、ホームページ開設の目的、問題点などお知らせ頂ければ有り難いと思います。こちらでは学生がホームページを作成することにより、情報関係の理解を深め、さらには就職のための情報発信することなどを目的としております。

カンペは数学教育を救う? (ciec1083-1088, 1091)

私自身も自作カンペの持ち込み可の試験にして、もう5年以上たちます。はじめは教科書・ノート持ち込み可にしてましたが、教科書を試験のときに初めて読むような学生がいっぱいだったのでやめにしました。このような自作カンペの持ち込み可の試験は、数学に限らずいろいろな教科でやってらっしゃる方も多くいると思います。上記紹介した話題は数学教育として書かれた記事ですが、コンピュータ利用教育を進めると、試験で何をできる能力を評価するはおおいに考えなくてはならない問題になってきます。しかし、一般の学習においては学習者自身の達成度の自己確認、また試験を通じて学習の方向性の確認や、最低限おさえるべき事柄の確認など、試験自体は学習過程において有効な点が多いものですからコンピュータを導入することによってどのような試験が望ましいかは情報交換を進めたい問題ですね。

地域研究会のお知らせ

三宅なほみ氏講演会と パネルディスカッション

CIEC 学生会員の縄田陽介氏が山口大新聞会を背負って企画しました。
CIEC会員の三宅なほみ氏の講演ですので、CIEC 会員の集う地域企画として、協賛しました。この機会にお近くの会員の方は是非お運びください。

会場：山口大 学内大学会館大ホール
(山口市 吉田 1677-1)

日時：1998年10月25日(日)

参加費：800円、懇親会参加費 3000円

主催：山口大学新聞会

協賛：CIEC / 山口大学生協同組合

講演内容

「知の共有の時代へ - インターネットが
大学の学びを変える - 」(仮題)

--「賢さとはなにか」という問いから、知の共有、
協調問題解決、ネットワーク利用の学びまで--

パネリスト

マルク・レール氏(山口大学経済学部・メディア論)

立山 紘毅氏(山口大学経済学部・法とメディア)

広中 平祐氏(山口大学長・不思議缶ネットワーク
を行った湧源クラブの立て役者)

(不思議缶ネットワークについては『不思議缶ネットワークの
子どもたち』美馬のゆり著・ジャストシステムを参照。)

司会

縄田 陽介(山口大学新聞会)

12:00 開場 / 12:30 開演

第1部 三宅なほみ氏講演 /

14:00 第2部 パネルディスカッション

広中平祐氏、立川紘毅氏、マルク・レール氏

15:30 大学会館レストランにて懇親会(立食パーティー) / 17:00終了

お問い合わせは 山口大学新聞会 0839-32-6880

98PC CONFERENCE 九州

テーマ：「教育、産業、文化と情報システム」

「PCカンファレンス九州」は、現在、大学生協連とCIECで共催して開催しているPCカンファレンス(CIEC発足の母体となったもの)に先だって開催され、このPCカンファレンス開催の原型となったもので、CIECでは地域研究会の一つとして位置づけ、毎年講師などを派遣しています。九州のCIEC個人会員、団体会員が様々な形で関わっています。

会場：長崎大学 本部キャンパス 中部講堂

日時：11月14日13時 ~ 11月15日12時30分

参加費：3000円(1日のみ1500円、学生無料)

懇親会費：4000円

主催：98長崎大学PCカンファレンス実行委員会

全国大学生協同組合連合会九州地連

長崎大学生協同組合

全体会記念講演 / パネルディスカッション

- ・インターネットなどをはじめ、コンピュータ利用の未来像を考える。
- ・身近な存在となりつつあるコンピュータとの出会い入門。
- ・生活の中にもあふれつつある「情報システム」をキーワードに、大学での情報教育の現状や課題を考える。ワークショップ
- ・インターネット接続体験講習会
- ・タッチタイピング講習会
- ・パソコン分解・組立講習会
メーカーの最新情報提供・展示会
ナイトトーク
分科会
- ・大学、学校現場、地域などでのコンピュータ活用の事例報告
このカンファレンスは、コンピュータを活用した教育・研究に携わる大学の専門の方々だけでなく、「パソコンをもっと活用したい。」と思っている地域や小・中・高校などの学校現場の方々の参加も幅広く呼びかけています。コンピュータをよりよく使いこなすための交流を、大学や地域、学校現場などの全体で進めていくことをめざしています。

どうぞ、ふるってご参加下さい。

ソフトウェア委員会

98年活動の一つの柱として、CIECware理念の整理を行いました。今後この理念の普及を行いながら多くの事例を収集する活動（「CIECware 活動」と呼ぶことにする）に取り組みます。

CIECware 宣言

1998年9月30日

CIEC (コンピュータ利用教育協議会)

CIEC (コンピュータ利用教育協議会) は、教育・研究の現場において価値が認められる、あるいは、利用の可能性が認められるソフトウェアやドキュメント (画像等も含む) の流通・共有化を支援するため、CIEC という「知の協同組織」の中で生まれ育っていくソフトウェアやドキュメント (画像等も含む) を集積し、普及する活動を行っています。このようなソフトウェアやドキュメント (画像等も含む) を「CIECware」という名称で呼ぶことを提唱します。

【CIECware の取り扱い】

「CIECware」は、以下のような取り扱いをすることができるソフトウェアやドキュメント (画像等も含む) です。

- (1) 教育・研究の目的で利用する場合には、提供された状態のまま利用することができる他、その一部を抜粋して利用したり、その一部を改変して利用することもできる。
- (2) 著作者は、利用者や配布者に対して、以下のような事項を、利用および配布に関する条件として指定することができる。
 - ・ 著作権者の権利を守るために、以下の条件を指定すること。
 - 1) 利用にあたって著作者名等を明示させること。
 - 2) 利用することによって得られた成果の公表にあたっては、利用したソフトウェアやドキュメントの名称及び著作権者名等を明示させること。
 - 3) (1) の範囲を超える利用や配布に対して一定の条件を加えること。
 - ・ その価値の共有を実現するために何らかの対価を提供すること
(対価とは、金銭に限らず、例えば、使用感の報告、新たな利用方法の提案等も含む)。

【CIECware の表記等】

著作者が【CIECware の取り扱い】に従う取り扱いを行うソフトウェアやドキュメント (画像等も含む) を公開し配布するとき、そのソフトウェアやドキュメントに対して、CIECwareであることを表記することができます。CIECware と表記した著作物を公開・配布するときには、この「CIECware 宣言」を添付して下さい (例: 添付書類として添付する)。また、ソフトウェアやドキュメント (画像等も含む) をCIECwareとして公開・配布することをCIEC事務局 (ciec-jim@ciec.or.jp) までその旨をご連絡下さい。

ただし、以上のことはCIECwareであることを表記したソフトウェアやドキュメントの著作者等が、その著作物をCIECwareであることを表記しないで独自に公開・配布することを妨げるものではありません。

CIECwareであることを表記して配布するソフトウェアやドキュメントがCIECの趣旨に明確に反すると判断された場合には、CIECwareであることを表記をお断りする場合があります。

—— CIEC 会員のみなさまへ ——

CIEC は会員がつくりあげる学術協同組織です。
会員活動サービスの内容が少しずつ整ってきましたので、それを大いに活用して、会員のみなさまが活動される一助になさってください。すこしまとめてみました。

各専門委員会の活動に参加できます。

(98年度通常総会では、各専門委員会の活動内容は7月初めのお送りしました議案どおり確認されました。詳しくはホームページ<http://www.ciec.or.jp/>トップページから各委員会にはいって内容をごらんください。)

メーリングリストで情報交換をおこなったり、会議をおこなったりしています。

ご希望の委員会がありましたら、事務局までご連絡ください。

専門分野などを生かしたグループ組織、地域グループ組織が出来たときには、事務局へご連絡ください。ネットワークを利用したグループ活動を保障しています。グループ用にメーリングリストのたち上げ、ホームページを使った意見交流の場が保障されます。ニュースレターを通じた呼びかけもできます。

教育関連の情報にホームページからリンクをはっています。会員に伝えたい、共有したい情報は会員から事務局までご推薦ください。会員からのご推薦は積極的にリンクいたします。

インフォメーションのメーリングリストへの投稿と加入を歓迎します。

ここへの投稿はホームページの公開掲示板に掲示されます。詳しくは後記の公開メーリングリストをご参照ください。

CIEC で現在公開中のメーリングリスト

1 ciec@ml.ciec.or.jp	コンピュータ利用教育に関する全般的な話題（主な対象者：CIEC全会員）
2 ciecnet@ml.ciec.or.jp	ネットワークに関する話題（主な対象者：ネットワーク利用委員会）
3 students@ciec.or.jp	学内のコンピュータ環境改善を目指して学生院生の交流（主な対象者：学生・院生）
4 information@ciec.or.jp	お知らせ・宣伝（主な対象者：CIEC 全会員）
5 science@ciec.or.jp	自然科学部会（自然科学教育に関心のある方）

登録方法

1 と 2 はそれぞれ

ciec-request@ml.ciec.or.jp

ciecnet-request@ml.ciec.or.jp

宛てに、メール本文の欄の先頭に、subscribe と入れて、メールして下さい。

3 と 4 と 5 は

students-ctl@ciec.or.jp

information-ctl@ciec.or.jp

science-ctl@ciec.or.jp

宛てに、メール本文の欄の先頭に、subscribe と入れて、メールして下さい。

CIECware ソフト

CIEC TypingClub

<ftp://ftp.ciec.or.jp/pub/CIEC/Mac/>（タッチタイピングMac版）

<ftp://ftp.ciec.or.jp/pub/CIEC/Win/>（タッチタイピングWin版）

